

木之本町

さきののちよ
木之本町

神のいます「木の本」

最古の史書・古事記に登場する「国生み神話」に、男神イザナギが女神イザナミの死を悼み流した涙から泣沢女神（なきさわめのかみ）が生まれとあり、生まれた神は「香久山ふもとの丘の上、木の本にいます」とも書かれています。

そして、この泣沢女神を祭る畝尾都多本（うねおつたもと）神社が、木之本町宮脇の天香久山ふもとに鎮座しています。古い神話に彩られたのが木之本町です。

南北朝時代・貞和三（一三四七）年の春日大社文書に、南都・興福寺の莊園（領地）として「木本莊」が登場します。この領地を巡って興福寺と土地の豪族・十市氏との間で、室町時代中期・文明六（一四七四）年に争いが起こり（寺社雑事記）、領地争奪が室町時代後期（一四七八）まで続いたようです。

江戸時代に「木之本村」と呼ばれた当地は、はじめ豊臣家臣・大野治長の領地になりますが大阪城落城後は、幕府領や伊勢・津藩領などになって明治時代を迎えます。

明治二二年に香久山村の大字になったあと昭和三年に桜井市大字を経て橿原市に編入され、同年一〇月に「橿原市木之本町」が生まれています。